



TITLE:

<批評・紹介>「京城帝國大學創立十周年記念論文集」史學篇

AUTHOR(S):

外山, 軍治

CITATION:

外山, 軍治. <批評・紹介>「京城帝國大學創立十周年記念論文集」史學篇. 東洋史研究 1937, 2(5): 488-495

ISSUE DATE:

1937-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138755>

RIGHT:

京城帝國大學 記念論文集 史學篇

京城帝國大學文學會論纂第五輯
昭和十一年十一月發行 價壹圓八拾錢

本論文集は京城帝大諸教授の論作集であり、同大學創立十周年を記念すべき刊行物である。その内容は、

高昌麴氏王統考

山東省黃石崖及び玉函山の石窟に就いて

史學に於ける *raison d'être* の本質

樂浪封泥續攷

大谷 勝 眞

鳥山 喜一

金子 光 介

藤田 亮 策

支那西陲出土の契

日清媾和の序曲

新羅六部考

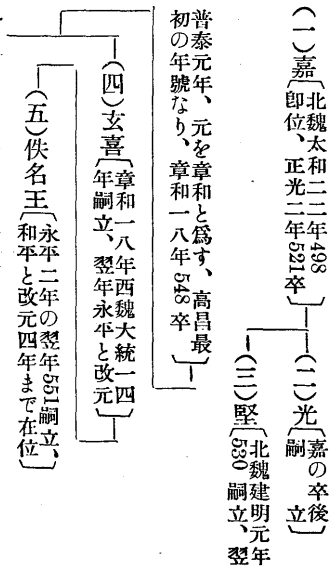
玉井 是博

田保橋 潔

末松 保和

の七論文から成つてゐる。以下簡単に紹介を試みよう。

「高昌麴氏王統考」之に關しては大正三年羅振玉氏の「高昌麴氏年表」(國學叢刊八、遼、居雜著乙集所收)、同四年内藤博士の「高昌國の紀年に就て」(藝文六ノ一一、讀史叢錄所收)、昭和五年黃文弼氏の「高昌麴氏紀年」(高昌第一、分本所收)等が發表せられてゐるが、著者は未だ明確ならざる點尠からずとて考究の結果之を得た。その研究方法は従前諸家と同じく近時出土發見せられし高昌關係資料にもとづくものであることは言を俟たぬ。くだしく紹介するよりは、著者の得た成果を圖示することが便宜である。



「(六)寶茂」〔和平四年の翌年、西魏恭帝二年535、嗣立、建昌と改元、同六年即北周武成二年560、まで在〕
 「(七)乾固」〔寶茂卒後嗣立、翌年を延昌と改元、同四年563、まで在位〕

「(八)伯雅」〔延昌四年即隋仁壽元年591、嗣位、翌年と改元、四年即唐武德二年600卒〕

「(九)文泰」〔伯雅卒後嗣立、翌唐武德三年重光と改元、武

德七年に至り延壽と改元、一七年即唐貞觀一四年卒〕

「(一〇)智盛」〔文泰卒後嗣立、國滅ぶ〕

〔嘉より文泰まで九世百四十三年〕

本論文に於ては、初代王麴嘉の即位の年次に關して羅氏の太和二十一年、黃氏の二十三年説を否定して二十二年説を提唱したのを始めとして從來の説に訂正を加へた點は少くないが、その中で最も重要なのは延昌治世の王を麴乾固と考へ定めたことである。この延昌の年號を記す墓表、經跋刊記は甚だ多く、元年辛巳歲より四十一年辛酉歲に至るまでの四十一年間に互つてゐるが、その治世の王名を窺はしめるものは唯一つ高昌遺跡の東方吐谷溝より發見せられた延昌三十三年の年記を有する仁王經卷末跋文〔西域考古圖譜上〕が知られてゐるのみで、それとても完全なものではなく僅かに王名の一部麴姓と名の字の頭部「𑖀」を存するに過ぎ

ない。内藤博士はその第一行を「延昌卅三年癸丑歲八月十五日白衣弟子高昌王麴𑖀以下殘缺、以上第一行」と解讀し、𑖀は伯の別字とする説に賛し之を麴伯雅の跋文と見、麴寶茂は建昌元年より延昌三十年までの三十六年間、伯雅の治世は延昌三十一年より延和二十二年まで三十二年間と推定した。マスペロ氏は之を麴堅と判讀して堅を延昌の王と定めたが、後年スタイン氏の吐魯番所獲の古文書調査中、般若波羅密經第十八卷の殘卷の跋文に延昌三十九年高昌王麴韓固の發願によつて書寫されたことが記されてゐるのを發見、之によつて麴氏年表を作つた〔スタイン氏内典、亞細亞誌附載〕。又羅氏は延昌年間に佚名の王の在位を認めてゐる。著者はルコツク氏が吐魯番より將來した古寫經卷中に西域考古圖譜所收の仁王經と同一經の殘卷〔ドイツ民族考、古博物館所藏〕があり、その跋文中に「延昌卅一年辛亥歲十二月十五日白衣弟子高昌王麴乾固」とあるを發見、延昌の王名は伯雅でもなく韓固でもなく明らかに乾固である。乾は乾の俗體であり、又屢々乾と書かれてゐる。頭部の小部分を残す圖譜の仁王經跋斷片の高昌王名は即ち乾又は乾の上部であることが知られるといひ、更に、寶茂につぐ王が乾固であるこ

とを確かめるべき傍證として高昌麴斌造寺碑の碑陰に刻する列名中、高昌王麴寶茂に次いで「右衛將軍多波旱鑰屯發高昌令尹」とあるを擧げ、周書高昌傳に高昌令尹は支那に於ける丞相の位置に當り、王子を以て之に任じた旨の記載があるから、乾固は正しく寶茂の子で、やがてその位を嗣ぐべきものであつたことが想像せられると言ひ、又跋文の末段に「又願七世先靈考妣往識」とあれば乾固自らが麴氏七代の王たるを確實ならしめると考へた。惜むらくは著者の發見した經の寫眞を示してゐないが、その王名が麴乾固なることは那波利貞先生の筆録によつても確められるから、延昌三十一年當時の王は乾固に相違なく、たとへ圖譜の卣を軌の字とするに多少疑問の餘地はあつても、延昌年間に二人の王の在位は認め難いから、延昌の王を乾固なりとする著者の説には充分賛成出來ると思ふ。著者は更に「寧朔將軍造寺碑」によつて高昌に對する突厥の關係を説き、寶茂、乾固等が突厥の稱號を有した所以を明らかにし、延昌四十一年に亙る長き治世にもかゝらず乾固の名の支那に傳はらなかつた理由は、高昌が突厥の勢力に服屬した結果であると推してゐる。突

厥との關係に就ては王國維氏の「高昌寧朔將軍麴斌造寺碑跋」(觀堂集林二〇)があるが之には言及して居らない。

「山東省黃石崖及び玉函山の石窟に就いて」(歷城縣黃石崖石窟(北魏)、同縣玉函山石窟(隋)の調査報告である。

「樂浪封泥續攷」樂浪郡の遺蹟に於て發見せられた封泥に關する精しき研究で、著者がさきに『小田先生頌壽記念朝鮮論集』に「樂浪封泥攷」と題して發表したものに訂補を加へたものである。就中興味を惹くのは樂浪郡管下の諸縣の官印封泥中「夫租丞印」の發見せられたことで、夫租は漢書地理志の縣名と一致し、沃沮の天が夫に轉じたといふ定説を否定するものであり、封泥研究の重要性の一面を物語つてゐる。

「支那西陲出土の契」新疆省及び甘肅省より發見せられた契即ち賣買典質貸借雇傭等に關する契約證書に就ての克明精密なる研究がその主要なる部分をなしてゐるが、その前に唐宋時代の契制といふ項目を設けてこの種の契約文書の名稱の變遷、證書の形式を述べ、清朝時代不動産の賣買に際して行はれた白契(私契とも作者が)、紅契(官契、印契ともいひ、所轄官廳より作る)、作契發給し、それには契稅を要する)の別が、

更に時代を溯つて明元宋五代唐にも認められることを説き、契稅徵集のことに關して闡明する所が多いのは注目すべきである。本論に入つては契の遺物として最古のものは新疆甘肅各地に於て發見せられた唐代のものでそれらは皆私契であるといひ、その發見の次第を概述し、著者が筆録した未だ公にせられてゐない契を中心として之を契約の種類に從つて分類し、一々解讀考證し、結語に於て唐宋時代の契の形式に論及してゐる。本論文は那波先生「正史に記載せられたる大唐天寶時代の戸數と口數との關係に就きて」(歴史と地理三三、唐鈔本唐令の一遺文(史林二〇ノ一、二)等とともに支那法制社會經濟史の研究に寄與する所甚だ大きい。那波先生も亦多數の契を筆寫せられ、そのうち、本論文三九—四〇頁掲載のものは「唐鈔本唐令の一遺文」(四)七六—八頁に引用してゐる。互に出入があり参照すべきである。

「日清媾和の序曲」 清朝政府が媾和の全權を賦與した大使として李鴻章を派遣するに至るまでの日清交渉の經過を説述したものである。明治二十七年十月李鴻章が媾和の發端を發見するに焦慮して天津海關稅務司

獨人デットリングを日本に派したが、その後清國に於ては米國公使デンビーの調停進捗によつて方針を變へデットリングを召還するに至りし顛末、デンビーの斡旋によつて廣島を以て會議の地となし、明治二十八年一月清朝政府は張蔭桓、邵友濂を全權委員に任じて派遣し、廣島に於て伊藤、陸奥等と會見したけれども、我方は張、邵は媾和締結の全權を賦與せられて居らず、且彼等が清國第一流の人物に非らざるに不滿を抱いて會議繼續を拒絶し、あらためて正當資格ある名望官爵ある者の任命を要求して之を放逐した顛末を叙べてゐる。叙述や、平面的な感を伴はぬでもないが、數多い資料を整理論述した功は偉とすべく、一讀吾人をして回顧的な感興を覺えしめる。

「新羅六部考」 從來新羅六部の問題に關しては、新羅王者出現傳説を考究するに當つて僅かに論及せられそれも單にこの傳説の部分的な解釋から極めて容易に且極めて大膽な推定が下されてゐたに過ぎなかつたが本論文に於て見られる著者の態度は全く趣を異にし、先づ六部傳説の内容を文獻的に總括し、傳説を構成維持した基礎的事實を考定し、次にこの傳説の内容を逐

一分析吟味し、最後にこの傳説の六部にさき立つ歴史的六部に對する推定を試みんとしたものである。まづ三國史記よりも以前の史料によつて詳細な記事を載せてゐる三國遺事を第一史料として六部傳説の内容を總括整理したが、之によると、六人の村長が六つの地點に天降つたことから始まつて關川楊山村、突山高墟村以下の六村が出来、それが及梁、沙梁、漸梁、本彼、漢歧、習比の六部に改名され、各部にはまた李、鄭、孫、崔、裴、薛等の姓が與へられ、高麗太祖天福五年に中興以下の六部に改名せられたといひ、その高麗末期に於ける比定地（中興部以下それ／＼東村とか南村とかよる大字的名稱と、それに屬する慶州府を中心としてつけられた方位に小字的落名が注されてゐる）を記してゐる。以上（一）六村、（二）六村長、（三）六村長の發祥降誕地、（四）改正六部、（五）六姓、（六）高麗初期の六部、（七）高麗末期の比定地の七條項を具備したのが傳説六部の完き姿であり、この七條項は全部を而も同時に認めねばならぬとした。次に著者はこの七項目のうち（六）（七）の二項を、否定し得ない事實で疑ひ得ない現實であると考へて、之を以てこの傳説を構成、維持した基礎的事實であると見た。即ち六部の改定は高麗初期の天福五

年高麗が新羅の末王敬順王金溥に慶州を食邑として與へた時になされたもので、この六部は高麗中期にはすでに公の通用名でなく半ば死せるものであつたことが立證せられるけれども、しかもその六部の區別と同時にその團結とは何らかの形に於て、何者かによつて保持せられてゐたので、遺事は（七）に見ゆる東村以下の六村がその保持者であつたことを示してゐる。更にこれら六村の大體の方位と全體の範圍を考へると、これは當時の慶州を中心とする政治經濟的一團としての單位に外ならぬことが判る。右の如き範圍の諸部落の結合は高麗初期以後のことである。新羅一統時代には溯らぬ。何となれば、史記地理志を見れば新羅國都としての金城（慶州）は屬郡、屬縣をもたずに孤立して居り、この事は王都の絶對的地位を示し、王都が孤立して政治經濟的に事缺かぬことを意味するからである。しかるにこれが新羅滅亡以後地方の一小都市となつてからはかゝる絶對的位置は繼續はできず、史記地理志は慶州が高麗中期には屬郡、屬縣を併せたことを記してゐるがその範圍は大略六部のそれに近く、又今の慶州郡の疆域とも略々一致する。すなはち天福五年の中興部以下

六部の改名改定は、實質的にはこの地方に於ける郡縣廢屬を意味するものとしか考へられない。そして傳説の六部はかくて生じた一團の結成から産み出された觀念的表現と解すべきであり、その内容としては(一)——(五)までの要素が認められる。慶州六部の結成はかくの如く新しいものであるが、傳説の内容がすべて六部結成後の所産であるか否かは別問題で、新羅時代何等かの結團を表示する六部といふものがあつてその觀念が名残を引いてかゝる形をとるに至つたものであらうと考へた。

かくの如き豫想の下に傳説の五條項を逐一吟味した結果、(一)六村は單なる便宜的な命名としか思はれず、(二)六村長に就ては未だ成案を得ず、(三)六村長發祥地は六村名に比すればやゝ具體性をもつが全體的に肯定できる配置を示さぬ。然し(四)六部は一統時代王京の區劃と存したこと疑ふべくもなく、恰も六里と言ふが如き觀念を以て記されてをり、(五)李氏以下の六姓が史記、遺事等に見えるものを拾つてみると部分的には三國時代にまで溯つて肯定でき、これら漢字姓は新羅一統時代の進行推移とともに普及したことが知られ

る。即ち(四)と(五)とは新羅一統時代の歴史事實と認めなければならぬが、(四)と(五)との縦の聯絡は成り立たず、まして(四)(五)(六)(七)の縦の關連は否定されなければならぬ。しからばこの傳説は全然否定されるかといふに然らず。この傳説の現實的基礎は、高麗時代に於てあらはれた慶州の都市經濟の組織の變化といふことに存する。傳説の六部はかゝる變化によつて出現した新狀態の上に立つものであり、その傳説の形態が六部といふが如き特殊な構成をとつたのは過去の即ち新羅時代の王京の地理的區劃の舊慣、一種の地緣團體を表明する觀念が尾をひいて、こゝに再び現れ、再組織されたのであると考定した。

更に著者は新羅時代に王京の區劃に似たものと考へられるこの傳説の六部よりも更に古き現實の六部に就て考を致した。及梁部(又は單)以下の六部を、之に關する最も古く最も確かな史料である眞興王四碑に就て考へるに、部名と考へられ考へられるものに喙(喙又は部が史記遺事の梁部に相當することは梁部は喙部に喙と書くことで知られる。古音はトク)沙喙、本液あり、沙喙は沙梁、本液は本比にあたる。他の三部は見えぬが、しかし見えないからとて之を否定はできぬ。

眞興王碑に見える三部の中でも喙が多く沙喙之に次ぎ本液は極く少いところから推して、部の勢力に甚しい差違があるから、その勢力は對立するが如きものではなく、又同時に成立したものでなく、次第に數を増して六の數に達したものであると思はれる。又日本書紀(推古、孝德、天智、天武紀)には沙喙部、喙部のほかに習部(即ち習比部)が見え、部の稱呼が少くとも一統時代初期までは確かに行はれてゐたことを知る。しからばこの部分けは何の區別であるか。沙梁は一統時代の史料には地名として九州の第一なる尙州州治の古名に、又本液は康州星山郡新安縣の古名に見出す。想ふに喙部(はちめの喙部の意)こそ本來の慶州の地に比定され、それに沙喙部(新しい喙部)が加はり、更に本液部が加はつた。慶州を中心とする新羅プロパーのものが沙喙を併せ更に本液を併せたといふ意味であらう。書紀の記載によつてこれらが法興王代に併合せられたものであることが證せられ、他の三部もまた法興、眞興王代に次々に加へられたものではあるまいか。それらは、新羅の領土擴大の結果、舊主權とその土地とを分離せしめて之を本源地慶州に移置し、しかも新羅の中央に於ける新

貴族として再組織せしめられたのであらうとした。この新組織に際して六の數が選定されたことには新羅プロパーに何か六の觀念を呼び起す現實の要素があつたのではあるまいかといひ、この點は將來の研究に期してゐる。

所論甚だ犀利であり示唆に富んだ一篇である。しかしながら六部の問題は全く解決せられてはゐない。著者も認めてゐる如く本論文に於て取扱つた六部は法興、眞興王代のそれに留つてゐるので、當時この新組織に六の數が選ばれたのは、新羅プロパーに何か六の觀念を呼び起す現實の要素があつたのであるまいか、この疑問に對する肯定的事實が擧げられた時、はじめてかの氏族社會に於ける部族同盟として新羅の六部は説明され得るであらうとて之に關する追究を本論文の續稿の一つとして豫約してゐる。さきに今西博士は、新羅王家の出自を考究するに當り、高墟部即後の沙梁部の長の家が六部の上に立つて所謂朴王家を起したものであるとした(新羅史研究)。及梁部を新羅プロパーとし、沙梁部を新しき梁部と解する著者の考定とは低觸すること一見明らかである。著者の期してゐる續稿には開

國説話との關聯に於て、之に關する先學の所説を如何に取扱ふかと期待される。

(外山軍治)